

気象幹部になる！

〈航空自衛隊 第4術科学校〉



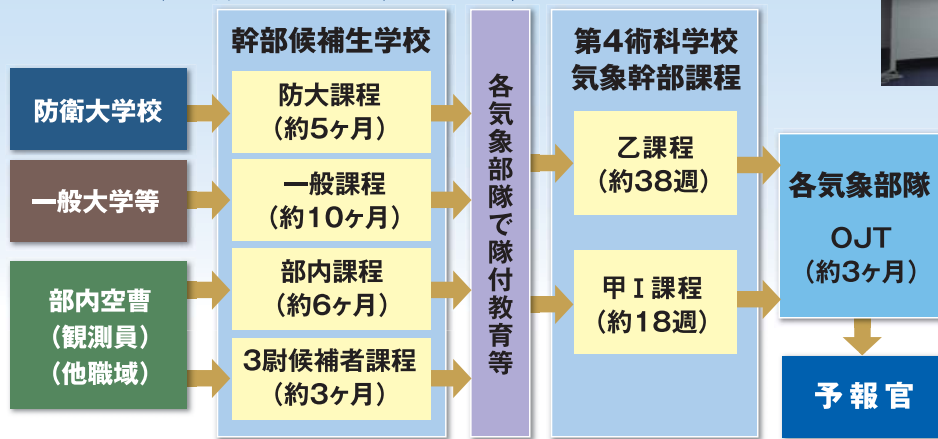
ブリーフィング前、真剣に予報している

毎朝テレビやネットで天気予報を見ている人は少なくない。最近では、その天気予報の解説を「気象予報士」の資格を持つアナウンサーが行う事も多くなって来た。テレビ等で見る天気予報よりもピンポイントで且つ一般生活には余り馴染みのない気象情報を必要とするのが、航空機の運航に係る業務をしている所。その最たる所が、航空自衛隊であろう。航空自衛隊では「気象予報」を実施するのは、気象の特技資格を有する気象幹部であり予報官と呼称される事もある。



気象所勤務演習実施中

予報官(気象幹部)への道



百里航空祭にて、演目実施のために気象予報は必要不可欠

航空機の運航上で必要な気象現象を「航空気象」といい、「航空気象」を予報・観測・通報するのが航空気象群の役割である。航空自衛隊では、航空支援集団(府中)隷下に航空気象群(府中)があり、さらに全国の部隊にある各気象隊で気象隊員が日夜、各種データと空模様と戦っている。

その気象隊は、予報班・観測班・整備班から成り組織されている。整備班の扱う気象レーダー装置を始めとする完璧に整備・管理された気象器材を使用し、観測班の気象観測員が観測したデータは、民間の航空機も使用しているという信憑性のとても高いもの。そして予報班は予報係と解析係に分かれていて、気象幹部(予報官)が、気象観測員の観測したデータや観天望気(直接、屋外に出て確認すること)などを基に、各飛行場の風向風速、視程、天気現象、雲量、雲底高度を予報する。



空中給油(機・手前)を実施するにも気象予報で左右される

航空機を安全に運航するために欠かせない「航空気象業務」を行う「気象幹部」になるためには、各気象部隊で隊付教育などを受けた後、術科学校で基本的な知識や技能を身に付け、「気象幹部」の特技資格を取得しなければならない。気象特技の隊員を養成しているのは、埼玉県熊谷市の熊谷基地(基地司令・阿部睦晴空将補)にある第4術科学校である。

先般卒業した第88期気象幹部課程(乙)の学生を例にしてみる。「気象職種における初級幹部として職務を遂行するために必要な基礎的知識及び技能を修得させるとともに気象幹部としての資質を養う」ことを目標として教育を受ける期間は、平成26年11月27日の入校式から平成27年10月8日の卒業式まで教育時間は10ヶ月余り1536時間になる。教育内容は、気象基礎から各気象学・理論・解析・予報・運用・支援など多岐に亘る。もちろん、精神教育や教練・サービス・体育などもあり、1日8限目までみっちり教育を受ける。数学や物理の教育もあり、毎期、微分積分等で苦勞する学生が多数…。

乙の期は、15名の学生が卒業しそのうちWAFが2人、陸上自衛隊から5人。階級は3尉、平均年齢は31歳である。入校して課程の概要を理解すると同時に、本当に充実した時間割が開始される。次から次へと受けないといけない各種履修科目ごとの試験の数もおびただしい。特に最近では、地球規模で過去の統計データにはない気象現象の発現も多く、分析・評価の難しさに拍車が掛かる。「部隊と違ってきちっと時間に終わるから、ゆっくり遊べますか?」と聞いても「勉強する事が多過ぎて、遊ぶ余裕はないです」との答えだった。

取材に行った9月28日には、卒業間近の気象所勤務演習として、操縦士等への気象情報を提供する気象ブリーフィングを行っていた。自分で収集した自分の勤務基地での気象情報を基に資料を作成し、ブリーフィングをするのだが、数時間前との違いなど素人の記者には画面を見ても解らない程の微々たる箇所もある。まるで、意地悪な間違い探しをしている感じた。微妙な風向風速、視程、天気現象、雲、気圧等の変化、地域性による特色などにより、「予報値はこのようになります」と自信を持って話す裏には、凄い努力があるのだろうと容易に想像できる。ブリーフィングの後は、操縦士等に見立てた教官から矢継ぎ早に質問が入る。そのため、発表していない部分もしっかり準備を的的確に回答できるようにしておかなければならない。

約1年の入校後、学生たちは部隊へ戻り、その基地での離発着する航空機の安全のため等に手腕を振るう事になる。



飛行の陰に気象支援あり!